

ベ ス ト ピ ア
Bestopia

「パリ通信 72号」

<http://jkoga.com/>

平成二十九年十二月
第七十二号

< 2017年 12月 >

古賀 順子

「東郷青児 展」

12月17日。朝からひらひらと雪が舞い散る寒い日曜日になりました。11月下旬脳出血で倒れた母の知らせを受けて、福岡県久留米市の実家に戻りました。不安定で暗い雰囲気に沈みそうになる病院を出て、久留米市美術館で開催中の「生誕 120 年 東郷青児 展」(2017年11月23日～2018年2月4日)へ行きました。緊張する看病を忘れ、絵の世界に入り込み、心休まるひとときを過ごすことができました。

1897年鹿児島に生まれた東郷青児(1897-1977)は、幼年期に東京へ移住し、青山学院中等部に入学。姉に勧められ画家を志し、日本橋呉服町に「港屋絵草紙店」を開いた竹久夢二(1884-1934)を知り、18歳でキュビズムの作品『コントラバス』(1915)を始めとする21点を個人展示しています。叙情的で、甘美でエキゾチックな東郷美人画のスタイルが確立される以前の作品です。

同時代の多くの画家たちがそうであったように、東郷青児に決定的な影響を与えたのが、パリ留学でした。1921年4月、「未来派宣言」で有名なイタリアのフィリッポ=トンマーゾ・マリネッティ(1876-1944)宛の有島生馬(1882-1974)の紹介状を携えて、パリへと出帆。パリに到着後、ミラノに住むマリネッティに会い、彼の紹介でリヨン美術学校専科に席を置いています。パリを拠点に、ロンドンやスペインを訪れ、南仏では装飾ガラスの図案工としての仕事をし、百貨店ギャラリー・ラファイエット・パリ本店装飾美術部に勤務しながら、室内装飾なども学んでいます。1928年31歳でシベリア鉄道で帰国するまでの7年間のパリ留学中、東郷青児は、ルーブル美術館を見て、1925年パリで開催された「アール・デコ国際博覧会」も見ていたに違いありません。第一次世界大戦が終わり、第2世界大戦が勃発するまでのパリは、「狂気の時代(レ・ザネ・フォル)」と呼ばれ、世界中から画家、詩人、音楽家た

ちが集まり、アヴァンギャルド芸術が謳歌した街です。アール・デコが開く20年・30年代のパリの真っ只中で得たものは、東郷青児の帰国後の画家としての変遷を支えています。

帰国後、東郷青児は、パリ時代から交流のあった藤田嗣治(1886-1968)を通して、富裕層を顧客とする百貨店の注文に取り掛かります。当時の百貨店は、大衆消費文化の発信地として、婦人モード、デザイン、ライフ・スタイルをリードする存在でした。1933年一時帰国をした藤田嗣治と東郷青児は、京都の丸物百貨店6階食堂に壁画を描きます。藤田は『海の幸』(1936)(171x173cm)。東郷は『山の幸』(1936)(173x173cm)。対を成す競作です。藤田が描いた金髪で青い目の西洋人、東郷が描く牧歌的な甘美な美人は、共にパリを知る画家が誘う西洋への憧れを見事に表現しています。今回の展覧会で私が一番好きな作品です。また、損保保険会社の東京火災(現、損保ジャパン日本興亜)からの継続する注文が、今日の東郷青児コレクションを構成しています。

心中未遂事件、宇野千代との不倫、モダンガールとの恋愛など、数多くの女性をめぐる私生活と二科会のドンとしての側面が強調され、作品自体は、大衆文化と位置付けられてきた東郷青児。生誕120年を機に、そうした評価を見直そうとする展覧会です。関東大震災(1923)後の復興を目指していた日本、百貨店に代表される総合芸術が時代を牽引していた日本。バウハウスに感化されたアトリエを建て、婦人雑誌の表紙を飾り、ジャン・コクトー(1889-1955)など、フランス文学の翻訳をし、装丁をデザインし、舞台緞帳をデザインし、クッキーを包む包装紙をデザインし、高級温泉ホテルの浴室モザイク画を制作する東郷青児。時代背景なしには評価できない芸術の変遷です。

1921年4月18日日本を離れ、6月3日マルセイユに到着。二日をかけてパリ。パリまで12時間の直行便で飛べる今日の私たちの留学からは想像できない時代だったに違いありません。近くなったパリ、そのために見落としていることも多いのかも知れないと考えた時間でした。

藤田嗣治「海の幸」

